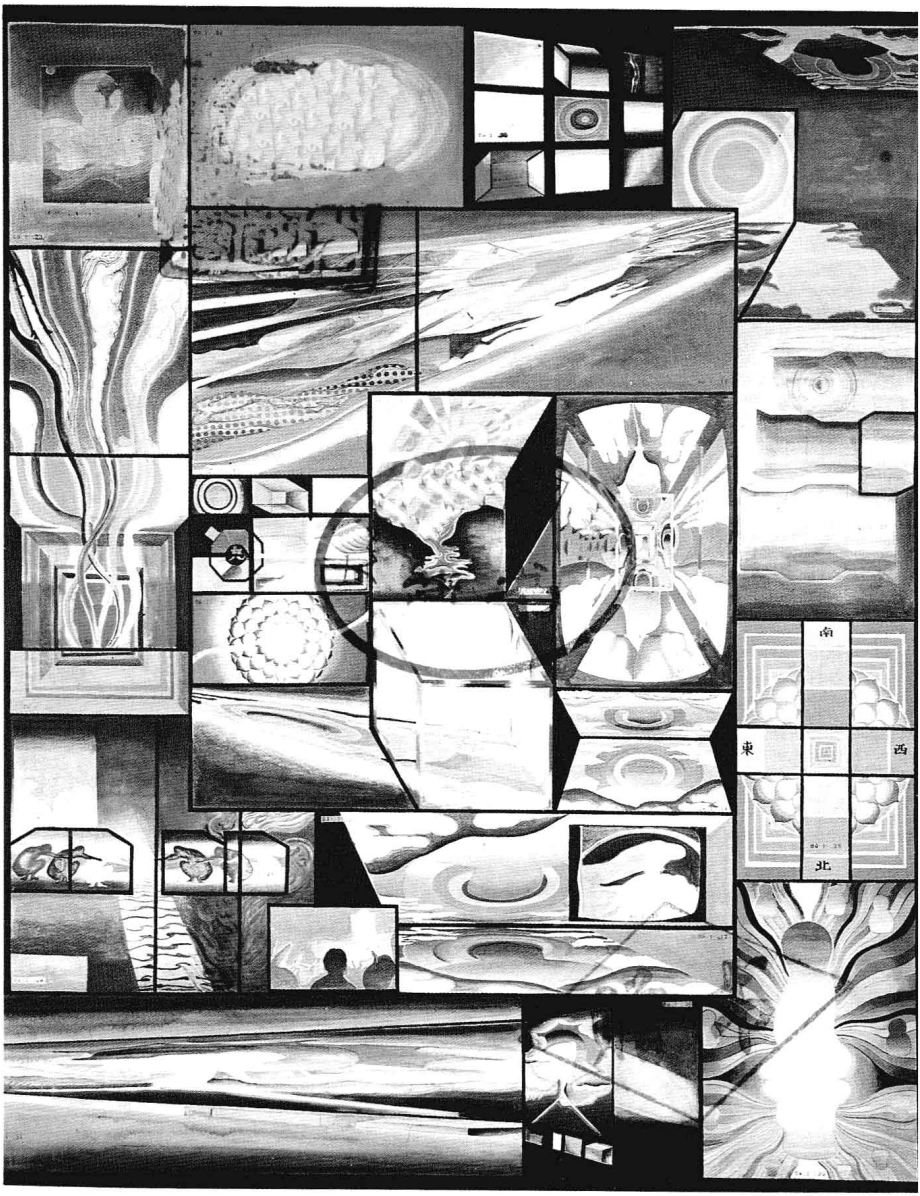
Mの世界

三田誠広

幻想の世界　三田誠広



河出書房新社

三田誠広（みたまさひろ）
昭和二十三年大阪市生れ、早稲田大学文学部卒。
昭和四十一年「Mの世界」で文藝学生小説コンクールに佳作入選。
昭和五十二年「僕って何」で第七十七回芥川賞を受賞する。
著書に『僕って何』『赤ん坊の生まれない日』（河出書房新社）。

Mの世界

昭和五十三年一月三十日　初版発行
昭和五十三年二月二十五日　再版発行

著　者　三田誠広
発行者　佐藤晧三
発行所　株式会社河出書房新社
東京都新宿区住吉町九五
電話・営業(三五五)五三一一　編集(三五五)五三二一
振替口座(東京)〇一一〇八〇二
印刷　三松堂印刷
製本　小高製本
©1978　MASAHIRO MITA
定価はカバー・帯に表示してあります

目次

Mの世界 ―― 5
体操教師 ―― 87
二十七歳 ―― 175

装幀原画　前田常作

カバー・広大輪光

トビラ・一九六九年一月マンダラ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

Mの世界

Mの世界

意識

その時Mの意識は、異常なほどに高まっていた。青や赤の電燈に照らされた商店街を歩きながら、Mはこのごろ時として持病のようにおこる、一種奇妙な感情にとりつかれていた。それはいつも何の理由も前ぶれもなく、突如として彼に襲いかかってくるのであった。その感情にとりつかれると、ふいにあらゆるものが自分と無関係に思え、自分自身の肉体すらも、何か自分そのもの、意識の根元である真の自分そのものとは、別のもののように思えるのであった。彼の意識は極度の昂奮のために疲れていた。肉体はまるで他人のもののように、せっせと彼を家の方へと運んでいたが、彼の意識はそれを、何か抗することの

できない、強烈な他者の圧力のように感じていた。さながら、母親の背中に縛りつけられた子供とでもいったふうに、彼は一切の意志を失なっていた。ただ彼は意識の目をしっかりと開き、自分のまわりにあるあらゆるものに、挑むような嫌悪と軽蔑の念をふりまいていた。彼は孤独であった。彼の意識は、もはや全てのものに現実感を失なっていた。商店街の美しく飾られたウインド、せわしげに街を行く大ぜいの人々、そしてその中を歩いている自分自身の肉体。そういった全てのものに、Mは丁度遠くから芝居を見ている時のような、ものうい白々しさを身に覚えるのであった。

〔まるで世界が一つの大きな舞台のようだ。俺はその上で一人のピエロを演じている。俺は疲れた老ピエロだ。けれども、ピエロには化粧をおとしてくつろぐことのできる、安らかな楽屋部屋があるのに、俺には真の自分に戻る場所がないのだ。〕

とある商店街の人ごみの中で、Mはふいに耐えきれなくなったかのように、路上に倒れこむのであった。大地に接吻して謝罪する罪人のように、彼は地面に顔を押しつけて横臥するのであった。けれどもそれは謝罪のためではなかった。赦しを乞うような相手があるならば！　彼が倒れたのは孤独のためであった。このように明かるい、このように人の大ぜいいる街角にいながら、なお彼は孤独であった。たしかに彼の目は、多くの人の姿を見、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

彼の肩は、すれちがう人々の肩に触れはしたが、しかしそれらの人々は、彼自身と関係をもったわけではなかった。ただ彼の肉体と関係をもったにすぎなかった。そして彼は自身の肉体に、奇妙な白々しさを覚えるのであった。肉体はあたかもそれが全てであるかのように、いたる場所で彼の役割を演じはしたが、彼の意識はたえずそれを傍観していた。さながら、演技をしながら本来の自分自身を忘れずにいる役者とでもいったふうに、彼は自身の生活になじめないのであった。彼は何かを抱きしめたかった。肉体だけでなく自身の全存在を揺り動かすような、強烈に切実な何かを抱きしめたかった。彼は泥に埋まりながら大地を抱きしめた。怪訝そうに彼を見おろす大ぜいの人々の目の中で、彼はしっかりと大地を抱きしめた。彼は肉体とともに彼の意識でそれを抱きしめることを試みた。しかし依然として、彼の意識は孤独の空間をさまよいつづけているのであった。彼の肉体が冷たい土の上をのたうちまわっているというのに、そして大ぜいの好奇的な人々の目にさらされているというのに、彼の意識は、まるで他人のことのように、一種軽蔑にも似た感情を抱きながら、じっとそれを傍観しているのであった。

家庭

そこはこぢんまりとした舞台であった。六畳ほどの小さな部屋に、一台のテレビと、食卓と、数人の人達。それぞれの人間がそれぞれの役を演じ、一つの自然なある雰囲気をつくりだしていた。団欒。彼等は家族であった。父と、母と、姉と、二人の弟。彼等はいかなる不自然をも生みだすまいと、慎重に気を配りながら演技していた。観客はなかった。いわば登場人物の一人一人が観客であった。彼等五人は自ら演技しながら、たがいに相手の演技を窺っていた。彼等のひたむきな努力によって、今この一家は自然な安らぎに包まれていた。しかしそれは壊れやすい安らぎであった。彼等はこうやって平凡ないとなみをしながらも、たえずあるものを恐れていた。自分達の間にむりやり不自然な何かをもちこむあるものを。それは彼等のもう一人の家族であった。その家族は、平生は家庭に波風がたたないように、彼等に歩調を合わせて演技をしているのであったが、ある瞬間、ちょうど自身の内部からどうしようもない熱病がわきおこったかのように、ふいに衝動的な、不自然な行動をとるのであった。そうするとそこに居合わせる家族達は、見たくないものを

見た時のように、たがいにばつがわるそうに顔を見合わせ、それから彼にむかって、冷たい怒りのまなざしをなげかけるのであった。

Mは身についた泥の不快さをどこか遠くに感じながら、よろめくように家へと歩いていた。彼はぼんやりと、彼の家族のことを考えていた。あの人達、病的に不自然さを忌み嫌う人達、平凡でないもの、自然でないものを徹底的に排斥する人達、けなげな、善良な人達。彼はあの人達のことを考えると、心が重苦しくなるのであった。彼にとって奇妙に思えることは、彼等が自分と血のつながりをもっているということが、どうしても実感として身に感じられないことであった。彼はいつも思うのであった。〔この他人が、どうしてあの他人と区別されなければならないのだろう。〕彼はあの五人の人達と一緒に、彼等の小さな居間にはいるたびに、怒りとも焦燥とも知れない、奇妙な不安を覚えるのであった。

その日も、Mが疲れた足をひきずりながら、その小さな居間の戸を開けると、家族の目がいっせいに彼に注がれるのであった。そして彼等はMの泥まみれの衣服を見ると、はっとしたようにたがいに顔を見合わせ、さながら、全く見ず知らずの人間に、自分達の平和を乱されたとでもいったふうに、敵意をもってMを見つめるのであった。Mはそんな家族

の目をぐるりと見まわした。すると彼は戸口に佇んだまま、しばらくは口もきけないのであった。肉体もかなり疲れているようではあったが、それよりも、この場の情景をどう理解したらいいか、彼には見当がつかないのであった。

〔これは何だ？　俺はどこにいる？　これが最も俺の安らぐべきところなのか？　ああ、たのむから俺をそんなに見ないでくれ。俺を見ているようなふりをしないでくれ。誰も自分を見ていない時の方が、もしかしたら誰かが本当に自分を見てくれるかもしれないと思えて、いくらかは気が安まるのだ。〕

気まずい沈黙のあとで、ふと誰かがこの場の不自然さに気づいたのか、それとも気づいていて耐えきれなくなったのか、ふいにとってつけたような新しい演技を始めた。すると残りの家族達も、我にかえったように、どっと演技を始めるのであった。こんなふうな、長く奇妙な沈黙が、非常に不自然なものであることに、ようやく彼等は気づいたのであった。彼等はこのように、家族の一員が思わぬ不幸にあった時、その家族がとるべき最も自然な方法を考えた。即ち、暖かい、やさしいいたわりの感情を。彼等はふいに、少しばかり恥じらいながらも、さも驚いたように、さもMを愛し心配しているといったふうに、どっとMのまわりに駆けよるのであった。

「まあ、一体どうしたの？　泥だらけじゃないの！」とおろおろしたように母が言う。
「早く服を着換えなさい。帰りが遅いので心配していたんだ。」と父が言う。姉は殆んど泣きだしそうなほど真顔になって、怪我はなかったかとMに尋ねる。弟達までが心配そうに、じっとMを見守っている。一見ほろりとするようなあわただしさ、愛の故のようなあわただしさが、彼をとりまく。と、その時、彼はふいに病から快癒したかのように、日の前の情景に実感をとり戻すのであった。彼は家族の心を騒がせたことをすまなく思い、あわてたような、しかし心のこもった言葉をもらすのであった。
「何でもないんです本当に。どうかそんなに心配しないでください。どこにも怪我はありませんから。え、どうしてころんだりしたかですって？　なあに、別に大したことじゃありません。つまり、ついうっかりと……、〔いや、そうじゃない！〕どうもよく思い出せません。〔しかし何だって俺は……〕多分何かにつまずいたんでしょうが……、そうです。おそらく僕はあの時何かに気をとられていたんです。心が空っぽになっていたんです。それで、何かにつまずいてしまったのでしょう。でも大丈夫。怪我はありませんでした。ああ、どうかそんなに大げさにしないでください。本当に何でもないんですから。」
こんなとりとめもないことを、どもりながら彼が言うのは、この時ふいに、何故自分が

あの時路上に倒れたのか、何のためにあんなふうに泥まみれになったのか、自分でも説明できないことに気づいたからなのであった。全くその時までは考えもしなかったのだが、今こうして家族に説明するために、あの瞬間のことをふり返ってみると、そこに動機とか理由とかいったものが、全く見あたらないのであった。

〔ふむ。自分で自分がわからないとは、奇妙なことだ。あれは病だったに違いない。しかしこれは考えてみる必要があるぞ。〕

だがこの時すでに彼の母と姉は、泥にじっとりと湿った彼の衣服を、かいがいしく脱がせはじめているのであった。父と二人の弟も、心配そうにじっとそれを見守っていた。一見愛に満ちた家族の視線を身に浴びて、Mは急に家庭の暖かさというものを、身にしみて感じるのであった。

「ちょっと、誰か着換えをもってきてちょうだい。あら、そうだ。お風呂のかげんをみなくては。」

そう言って母は忙しそうに風呂場へ走る。末の弟がMの着換えをもってきてくれる。姉は、彼の美しい姉は、肌が触れあわんばかりに彼によりそって、彼の着換えを手伝ってくれる。暖かい姉の息吹きが、たぐいない香料のように彼の肌に感じられる。この快さ、胸

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c